



Title	契沖の人と学問
Author(s)	久松, 潜一
Citation	語文. 1951, 3, p. 15-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68378">https://hdl.handle.net/11094/68378</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 契沖の人と学問

## 久松潛一

### 一、序

契沖が元禄十四年一月廿五日世を去つてから今年は二百五十年に当りますが、この機会に私は契沖研究を回顧するとともに契沖はどのようにして居るかをその人間と学問との上から考へて見たいのであります。契沖については近世でも本居宣長の如きその価値を認め、居るが、眞淵や平田篤胤の系列では必ずしも重んじてゐないのはその僧侶であつたためもあると思ひます。しかし契沖の人間性とその学問とは時代のたつに従つて一層その光輝を増して來るのであります。

私が契沖の研究に志しましたのは、大体、大正五年から八年までの学生時代からであります。八高時代の恩師で、後に大高の教授になられた山内二郎先生にすゝめられて志したのであります。次いで東大で、上田万年先生の御指導を得て研究題目に選びました。契沖の学問の確実な実証性には深くひきつけられながら、到底私等の及ぶところではないと幾度か挫折さうになりましたが、中止しては男子の佑券にかゝると思つて、熱意をふるひ起したことであります。卒業後、佐々木信綱、新村出、橋本進吉・武田祐吉四博士の契沖全集刊行の際、契沖伝をまとめることになり、契沖の跡を方々

に訪ね、資料を探して歩きました。その頃（昭和二年頃）まで、私は契沖研究に熱中してゐましたが、その後、志を持ちながら、他のことに時間をとられ、研究はあまり進んでゐないので、今日はかつての研究を回顧してお話しすることにします。

契沖歿後二百五十年を期して田珠庵復興のことを当地にて企てられ、いよいよ実行にうつされるにあたり、契沖業績の再確認のために聊かでもお役に立てばと存じて来ります。なほ、契沖全集の刊行にあたりましては朝日新聞社前社長村山龍平氏の助力の大きかつたことを佐々木博士の伝言としてこの際申添へさせて頂きます。

契沖の学問については先程来のお話しにつけ加ふべきことも少ないのであります。が、研究に熱中してゐた頃、関係地を歩いたことも多かつたので、その土地を中心として契沖の伝記を回想し、また、わたくしが契沖にひかれた所以を申しのべたい。一人の作家・学者が如何なる時代に生活し、活躍したかの考察と同時に、土地から受けた影響も考へることが必要であつて、小島博士の「大阪の和学」の話に述べられたところに同感であります。その意味で、契沖のゐた土地も、彼の学問を知る上で大切であると思ひます。そこで、土地を中心にして、年代順にした表を御覧ねがつて話を進めてまいりま

す。その前に、明治以後の契沖研究について一言すれば、円珠庵の上田照遍著の「契沖阿闍梨伝記」、宇田川文海の「契沖阿闍梨」大町桂月の「契沖阿闍梨」（大町氏の学問としても、契沖研究としても翻期的）その他上田万年博士の契沖の家系や兄弟などについての研究があり、佐々木博士の和歌史の研究には契沖の資料があつかはれており、岩橋小彌太氏や、故彌富破摩雄氏らによつて部分的に明らかにされたところもある。その後も、伝記研究上新資料の発見や、それに伴ふ新開拓もあつたことと思ふ。昨年暮、高林誠一氏の壇文化論文中に高野山時代の師、快賢の伝記が詳しく調べられてゐましたのなどはそのひとつであります。

### 契沖家系及略年譜

寛永九年五月廿九日 加藤忠広改易

下川元宜 元金 元真

間氏  
快旭  
妙善信尼（岡田茂左衛門母）  
多羅尾平蔵  
伊藤の龜山にある弟（？）  
早逝

元氏（如水）

### 二、人

#### 熊本

契沖は多分、行つたことはないと考へるが関係深いことは申すまでもありません。下川元宜は加藤家に仕へ、五千石をとり、長子元真（契沖の伯父）は一万石を領してゐました。水戸義公の加藤清正侍帳には、「一万十一石七斗一升下川又左衛門」とあり、朝鮮の役に際しても、内助の功多く、相当の地位を占めてゐましたが、寛永九年五月廿九日、加藤家の没落の際隸を離れました。この境遇から

#### 今里妙法寺時代

十一才（慶安三年）—十三才（承応元年）  
一六五〇—一六五一

#### 高野山時代

十三才（承応元年）—二十三才（寛文二年）  
一六五二—一六六二

#### 生玉曼陀羅院時代

二十三才（寛文二年）—二十七才（寛文六年）  
一六六二—一六六六

#### 再高野時代

二十七才（寛文六年）—二十九才（寛文八年）  
一六六六—一六六八

#### 和泉久井時代

二十九才（寛文八年）—三十四才（延宝元年）  
一六六八—一六七二

#### 和泉万町時代

三十五才（延宝二年）—三十八才（延宝五年）  
一六七四—一六七七

#### 河内撰津鬼住吾孫子時代

三十八才（延宝五年）—三十九才（延宝六年）  
一六七七—一六七八

#### 再妙法寺時代

四十才（延宝七年）—五十才（元禄三年）  
一六七九—一六九〇

#### 高津円珠庵時代

五十才（元禄三年）—六十二才（元禄十四年）  
一六九〇—一七〇一

も、その後者でありました。

浪人が出たり、学問的業績を挙げた人も出たのですが、契沖の一族  
契沖が生れたのは尼ヶ崎で、父が二百五十石を食んでいた頃であ  
りますから寛永九年の時の苦境を知らなかつたとはいへ滅祿による  
家計の苦しさを知らずに過した筈はなく、若くして出家し、他のひ  
きとめるのも聞き入れなかつたといふのは、この間の事情が一つ  
の原因となつてゐたのではないかと考へられます。

大阪において談林の祖師宗因は、契沖に比し三十五才もの年長で  
ありましたが、加藤家の一族で、八代に亘る正方に仕へ、やはり、  
寛永年間に祿を辞して京大阪で連歌俳諧をはじめたのでした。この  
二人はともに元禄文化の花を咲かせる上に功があり、元禄の文芸  
復興を思ふ時、この二人が、同様な境遇にあつたことは意義深いも  
のがあると思ひます。

契沖の兄弟は八人あつたが二人は早逝し（伊藤の龜山にある弟と  
多羅尾平蔵とが同一人ならば五人であるが）あと六人は後まで存  
命しました。弟快旭は熊本不動院の住職をし、その碑はいまも熊本  
にあります。わたくしも二度参りましたが、最初の時は失はれてゐ  
ましたが、二度目には、発見されて修理されてゐました。このやう  
に契沖の時代にも弟は熊本にゐましたし、熊本の本妙寺における  
「日本紀竟宴和歌」を紹介したのも契沖であります。彼と熊本  
との縁は深いものがありました。

### 高野山時代

十三才から廿三才までの十年間を、高野山に居て仏教の修行に專  
念しました。義剛、微雲軒、淨嚴らとはその頃に親交を結んでゐま  
した。また、師であつた快賢、二度目の高野山時代の師快円ともに  
すぐれた僧であつたやうです。快円の弟子の蓮体については近松が  
淨瑠璃も書く場合に教を乞うたらしい、と宇田川氏や高林氏が書い  
てをられます。彼らは契沖との交はりにおいて仏道だけでなく、文  
学にも親みをもつやうで、また人間としても誠実であり、現実ばな  
れのした——微雲軒など奇人といはれてゐた——人々であつた。こ  
のやうな交はりの中に契沖の人間的な性格の片鱗がみられると思ひ  
ます。曼陀羅院時代の下河辺長流との交はりもまた、水魚の交はり  
とでもいふべき美しいものであります。契沖の交際は決して広く

### 尼ヶ崎時代

この時代には不明の点が多く、その頃の契沖が母の德育の下に聴  
明で、将来の學問に進むべき素地のあつたことはいろんな逸話から

はなかつたが、極めて美しい純粹なもので、そのすぐれて立派な人柄を思はせるものがあると思ひます。

曼陀羅院を出て高野山へのぼる前に契沖は、室生寺にゆき、室生の自然の美に打たれて感動の餘り、岩に頭をぶつけ死なうとしましたが果さず、翻然仏道修行に没入していつた、といふ逸話からも、契沖が人間として如何に生べきかに深刻に悩んでゐたらしく、いはゆる妥協をしないで、あくまで自己の信念を押し通はしてゆかうとする性格のために、現実との矛盾に悩んだのであります。が、正しい信念に生きなければやまなかつた契沖の純粹さ、潔癖をこゝにわたくしたちは、はつきり知ることができると思ふのであります。

### 久井時代

高野山を下りて、和泉では久井に五年ほどをり、万町にも五年ほどの間ゐました。久井では真言宗の信仰の厚つた辻森吉行といふ人のところに身をよせ、こゝで悉縗のものとか、漢籍をひろく読んでゐました。契沖の学問はこの時代から、真言に限らず、広く仏教の研究とともに、漢籍にも及んでゐたのでありました。

### 万町時代

伏屋家にいつたのについては、契沖の祖父元宣や伯父元真が加藤家に仕へ、伏屋重賢の祖父一安が秀吉に仕へたりしてゐた関係からであるといふことが伏屋家にあつた摺物によつて知られるのであります。伏屋家には、日本の古典が數多くあつたので、久井時代に、仏典漢籍をよみつくした契沖は、ついで、こゝで目にふれた日本のが古典を研究して居るやうであります。

契沖の最初に伏屋家にいつたのは延宝二年、三十五才の頃であります。が、同年八月三日には宗因が七十才の時であります。が、高野の途次泊してゐます。その摺物にも邸内の梅の屋に西山梅翁遊宿す

とあります。この二人が会つたかどうかは確実ではありませんが、想像できるところであります。宗因が談林十百韻や大阪独吟集を行して談林派を確立したのはその翌年であります。その場合、契沖と宗因とが相会してゐたとしますと、加藤家に仕へた契沖は、ともに昔を語りあつたかも知れず、主人の伏屋重賢が秀吉にゆかりのある人で、和泉の山村の昔語りも、零落した武士の名利をはなれた学問、芸術への志向を高めたかも知れません。伏屋氏は泉州史を書き、蘭学の上にも業績があるといふことである。これは杉田玄白の蘭學事始を研究して居る内山博士から聞いたことであります。近世学問発生の土地として、この泉州万町を考へるのもわたくしの想像ではありますけれど、許されることかも知れません。

### 我孫子時代

万町から妙法寺住持となる前、延宝五、六年の頃に、契沖は摂津我孫子にゐたらしいであります。妙法寺記にも、生駒宝山寺藏の儀軌の奥書にも見えて居ります。普賢金剛薩埵念誦法の中に

延宝五年十一月廿一日於内州小西見村寓居之暇写之

とあり、十一月から十二月にかけて写して居る淨藏の鬼住の延命寺の近くに居たのであります。孔省明王画像壇場儀軌の奥書に

延宝六年五月三日於摂州住吉郡吾孫子村写之了 沙門契沖三十九となり、妙法寺記には

同年（延宝六年）四月十日頃ヨリ摂州住吉郡我孫子村權右エ門屋

敷ノ内ニテ庵室ヲ借り移ツテ同霜月ニテ彼所に罷在候事

となつて四月より十一月まで居たことが分る。この間に特に儀軌書字や校合を行つたのであります。儀軌の奥書を見ると延宝六年が最も多く、延宝五年や延宝九年にも校合して居り、古くは天和二年三年から、貞享二年のものまでありますが、延宝五、六年のものが最も多いのであります。契沖が延宝六年に相当長期に涉つて我孫子に留つてゐるのは、妙法寺を淨嚴に譲らうとしても成らず、契沖が住持となるに至るのであります。その後の手続が延引したためであります。漸く七年に妙法寺にうつてゐますが、その間寸刻を惜んで書写に励んでゐたらしのであります。妙法寺の住職になるまでの契沖は、仏典・漢籍・日本古典をひたすらに研究し、一書を読みれば、更に他に移つて研究するといふやうに、すべてを偏らず、手に入るものは何でもとり入れようとしてゐた熱意のほどがうかゞはれるのであります。妙法寺時代までの彼の著書として分つてゐるのは一つしかなく、まだあまり書くことはしてゐなかつたやうであります。万町時代に「正字類音集」といふのがあるのみであります。妙法寺時代に仮名遣・辞書などを次第にまとめて來ります。契沖の蘊蓄はこれまで計るべからざるものになり、それが著述の上に反映してゐるのであります。万葉代匠記（天和三年）は初稿本の出来たのが元祿三年であつて、妙法寺時代にその業が終つて居りますが、これは義公の囑をうけて万葉集の注釈を行ひながら半ばにして亡くなつた長流の遺業の完成とみられるのであります。一庵、それが出来上つてのちも、書状風にしてその後に得た解釈を戸へ送り届けてゐるのであります。それは円珠庵時代まで引きつゝいてなされてゐるのであります。

### 円珠庵時代

妙法寺を弟子にゆづり、円珠庵へうつたのは、母が死んだ時であり、契沖は母を養ふ事がなくなつたので隠棲したものであらうと思はれます。それ以後も蘊蓄を傾けて古典研究に専念し、「和字正濫抄」をまづ書いてります。俗務から解放され、専ら学問に専念できたのであります。元祿九年、弟子のために万葉集の講義をしてゐますが、伏居重賢に聽講をすゝめた手紙の中に耳も悪くなり、齒も抜けてしまつたが、万葉集においては第一人者であると言つてをり、このことからしても、平素控へ目な契沖の自信のほどがうかゞはれるのであります。

### 三、学問

以上、わたくしは、契沖の生涯を跡づけてまゐりましたが、契沖が何故に私どもをひきつけるかといふと、一はその人間的魅力であります。学問に対する魅力であります。さうして結局に於て人間と、学問とが、ぴたりひとつになつてをり、人間として強い信念に生きた点が彼には十分うかゞへるのであります。そして、その信念がはじめから固定した信念なのではなくて、生命をさへ捨てようとするほどにまで悩み苦しんだ、その中から次第に得て來たものであつたのであります。契沖が生涯にわたつて築き上げた学問が、しっかりと実証的な基礎の上に築かれたものであり、非常に理性的なところもあつた一面、情熱的なところもあつたことがよくうかゞへるのであります。時には頑固にさへ見えるところがあるのも、武士の生れであつたことや、またその家の環境に影響されてゐた点もあ

りませう。それがだんだん海のやうに広くなり、淡々として強さの中に、周囲に対する暖い愛をもつ人格をつくりあげていったのであります。遺言状に書かれてある点や友人や、師との交はりからもこのことはよくうかゞはれるのであります。このやうにして築きあげた契沖の人間は磐石のやうにゆるがない感を与へるのであって、わたくしがそこに見るのは人間としての契沖であり、また、その人間から自然に現れた点に契沖の学問の特徴もあるのであります。

契沖が古典を研究する場合に文献を重んずる方法は古典研究の基礎となつて居り、この傾向に晩年までつゞいてその学究生活を貫くのであります。これは教研究の方法から得てゐるのはなからうかと思はれます。同じく僧侶であり万葉集を生涯にわたつて研究した仙覚も道理と文証とを方法的にといて居り、それを実践して居りますのもその点を裏づけるのであります。仏教を研究し、漢籍を学んだことが契沖の古典研究に大きな示唆を与へたかと考へられるのであります。契沖の学問が単にその歴史的意味においてのみならず内容自体も今日においてなほ、確固たる学説として生命を有してゐるといふことはこゝにその因があるのであります。さうして彼が仏教研究からその方法論を学びながら同時に、文学において中世に多かつた仏教的な文学觀から離れ、文学に立脚して「もののあはれ」説の先駆をなしたのも、仏教に基盤をおきながら仏教に縛られなかつた態度によるのでありました。彼が最後まで私淑してゐた水戸義公の

神儒を崇んで儒仏を排し、老莊を崇んで老莊を排す。といふ態度、精神に両者共通したものを見るのであります。言はゞ

その点に、当時の自由討究の精神があつたといへるのであります。わたくしは最も尊敬できる学者として、青年時代から契沖を第一に挙げてまいりましたが、日本の学問の上においても、契沖はやはり重んぜられるべき人であります。その契沖に、時にゆかりの深い大阪は、この土地にこの学者をもつたことを、おほいに誇りとすべきであらうと存じます。

今回の、契沖阿闍梨頭影の事業が故人に縁故の深い大阪の皆様方によつて企てられてをりますことは大きなよろこびであります。さらに深い関心をもたれてこの意義ある事業を完成され、そしてまた、日本文化に貢献されますことを願ふものであります。

(昭和二十六年一月廿六日大阪朝  
日新聞社講堂に於ける講演概要)

### 正誤表

#### 第二輯掲載

「奥の細道」制作過程について  
(杉浦正一郎氏)

四 頁	四行目	定なき願	×	
十九頁	下十行目	□更本	×	
廿 頁	下最後の行	杉風が	×	
廿一頁	上十六行目	か。か。	蘭。	
廿一頁	上廿行目	様ひろふ	×	
		様。	×	
		笠島の「条の……」。	×	